

活動分野	森に親しむ懇談会（もりこん160）		
タイトル	身近にある市街地の森		
実施日時	平成31年2月21日（木）18時45分～20時45分		
実施場所	船橋市中央公民館 5階第1・2集会所		
受講者	19名	FIC会員	19名

### 活動の内容 「身近にある市街地の森」の変遷をたどり、現代的な効用と活用を考える

#### 栗田講師

- (1) 講師の住む市川市と松戸市などの身近にある市街地の斜面や台地には狭いながらも森林植生が残っている。これらの身近にある小さな森の植生と人との関わり合いの変遷をたどり、現代の里山としての効用と活用を考えるのが本日のテーマ。
- (2) 過去の植生や人と森との関わり合いの変遷を調べる。
- ① 150年程前までのことは、過去の地形図、航空写真、明治13年（1880年）版の陸軍迅速側図（右図）を利用することで明らかになる。
  - ② さらに古い時代は、ボーリング調査や遺跡調査による木材・葉・種子などの植物化石、花粉や孢子などの微化石、植物が燃えた後の炭化物などの植物遺体を分析することで明らかになる。最近では低湿地遺跡の水漬けされた遺物や堆積物などの調査・分析により、人の植物利用の実態と、生活環境が明らかになってきた。
  - ③ 野田市のボーリング調査の花粉ダイアグラムによると、当地に人が住むようになった最終氷期の旧石器時代は、現在の北海道にある針広混交林に似た植生、また国分谷（こくぶんだに）低地ボーリング調査の花粉ダイアグラムからは、縄文時代の前期～中期はコナラ亜属を主力とした落葉広葉樹林。縄文時代の中期～後期は、湿地帯にハンノキ等、斜面や台地には落葉広葉樹林と、カシ類などの常緑広葉樹林が優占する植生に遷移していったことが分かってきた。
  - ④ 縄文時代には、海の幸に比べ多くの割合を山の幸に依存していたことが古栄養学分野の研究から分かってきた。山の幸の中心となっていたのはクリであり、クリは人為的に育てられていたことがうかがわれている。
  - ⑤ 弥生時代以降、稲作の普及とともにクリやトチノキなどの依存度は低下した。ハンノキ林は伐採され、水田の開発が進んだ。遺跡より出土する炭化材などの割合から、クヌギなど落葉広葉樹林は薪炭材として利用が継続され「里山」として維持されてきたようだ。しかし現在では里山の利用価値と経済価値が失われてしまった。
- (3) 里山ボランティア活動
- ① 市街地の森には環境保全的な機能と共に自然体験、環境教育、保健・休養といった社会的機能も要請されており、活用次第では、生活に不可欠な「都市施設」になり得る。
  - ② 伝統的な里山に定期的な人の関与が必要であったように、市街地の森を活用していくためにも継続的な人の関与（整備・保全活動）が必要。里山ボランティア活動を通じて森林に関与することは社会的要請に応えることであり、活動に参加することは、自らも活動を楽しみ、やりがい・生きがいを感じることができるものである。



陸軍迅速図

